



2021もぎたてりんご便 12月号③



「子どもの『できる』に注目」～伝えるを伝えるへ～

- 現場実習で高い評価を得た高等部3年生のSさん、最後の難関である面接試験に挑む時がやってきました。何事にも真面目にコツコツ取り組むSさんは、みんなから好かれており、頼りになる存在ですが、言葉で自分の意思を伝えることに苦手さがあります。学校では、周囲の理解に加えて、相手の顔を見てゆっくり話したり、ジェスチャーを交えて伝えたりすることで、相手に伝わるが増えました。しかし、改まった状況下での面接試験は、Sさんにとっては大きなハードルです。
- 学校では、ハードルをステップに変えるために、Sさんの「できない」に注目するのではなく、「できる」を最大限生かした「できる状況づくり」を考えました。
 - ①不安を取り除くために、面接会場を慣れた学校で実施する
 - ②自信をもって面接に臨めるように、自己PR、志望動機、学校生活で頑張ったことなど、質問内容を絞る
 - ③自分の意思が伝わるように、言葉だけでなく、ジェスチャーをはじめ、文字やイラストを活用する

この「三つのお願い」を会社側の了承を得て、面接試験に臨みました。面接を終えたSさん、胸を押さえて「緊張したー」と話していましたが、すぐに満面の笑みになりました。子どもの「できる」を活用することで、子どもが苦手さを改善しようとするきっかけになると思いました。
- 面接では、相手に伝わったかという視点が大切になります。「伝える」とは、自分の考えや思いを、一方的に相手へ受け渡す「行為」であり、主語は自分です。それに対して、「伝わる」は、自分の考えや思いが相手に伝わっている（通じ合っている）状態を意味し、主語はあなたです。「伝える」と「伝わる」は一文字違いですが、大きな違いがあります。「伝える」は、言葉のドッジボールであり、「伝わる」は、相手を取りやすいところに投げるキャッチボールです。「伝えつつも」にならないように、「伝わる」コミュニケーションを目指したいものです。
- もうすぐサンタさんが、一足早いクリスマスプレゼント（内定通知書）を、Sさんの枕元に届けてくれることでしょう。



かづの校副校長 加賀谷 勝

